短歌の現在

No.375　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

鳩の巣は、二階から見てほぼ平行、またはやや下方の位置にあるらしい。だから、胸の下から覗くようにしてヒナが見えるのだ。下から見上げた斎藤茂吉の「のど赤き……」とは角度がちがう。毎日、楽しみに覗いている感じが読める。

川床に向かい合いつつ鮎食めば君の背後の青葉かがやく　今井洋子

京都の清滝の川床である。なんとも羨ましい場面を、たんたんとオーバーではなく表現して楽しい作とした。清流の音、風のそよぎが聞こえるようだ。

明け暮れの霧にこもりて心音のふるへるやうなとほきかなかな　斎藤佐知子

霧のなか、遠く聞こえるヒグラシの声である。夜明け前の時間だ。あたりはまだ明け切らない。やや暗い時間帯である。朝が来る寸前の、ほんの数分間の微妙な時間をうたった一首。

壁に映る階段の影を人間の影がくだりてゆくまた一つ　谷岡亜紀

無声映画の映像のような一首である。前後のストーリーは分からない。ここがどこなのかも分からない。ただ、動きのある映像が眼前に出現するだけだ。断片をクローズアップして、全景を切り捨てたことによって生じた物語。省略によって想像力が挑発される。

夕暮れの川のむこうは赤いから、こっちこっちと兄さんが呼ぶ　上原良美

椋鳥も巣に帰りゆく夕暮の橘通り息子と帰る　大口玲子

「橘通り」は宮崎市の有名な繁華街の通り。「東北を捨てて宮崎県庁前……」という作も一連中にある。小さな息子がいる作者は、宮崎に待避しているのだ。だから、いま、作者にとっては「帰る」という語は、独特の意味とニュアンスをおびる。第一・二句と以下との対比、うまくいっていると読む。

人間の匂いを消せずに立っている三頭身と握手をしたり　鈴木陽美

東京歌会で高点を得た作。縫いぐるみである。いま流行のヒコニャンなどのユルキャラ、ディズニーランドのミッキーマウスなどをイメージすればいい。「人間の匂いを消せずに」が、見事。ユーモラスでいて、どこか哀しい。そんな余韻が感じられる。

地球儀は我が家にあらず球体を回すことなく子らは育てり　久松洋一

「球体を回すことなく子らは育てり」が可笑しい。ユーモラスである。わが家にないものを数えてみる。当然、子供たちはそれを知らないで育った。それぞれの家庭で、それぞれに無いものがあり、それぞれの育ち方をした子供がいる。テレビのない家庭、畳のない家庭、四角い皿のない家庭……。

二階よりのぞけば二羽のヒナの顔鳩のゆたかな胸よりのぞく　矢野良彦